



星の文化史 世界13地域における星の知識・伝承・信仰

後藤 明 編著

丸善出版, 254頁, 定価4,500円+税

読み物
お薦め度
5
☆☆☆☆☆

古代人は星をよく観察した。星の出没方向や運動の周期性に意味を見出し、月や太陽の動きから方位を知り、暦を作り、生業に役立て、儀礼に取り込み、天体を神格化して信仰の対象とすることもあった。大規模なモニュメントを建造し、その信仰や暦観を刻み込んだ文明もあった。古代において星と人々の生活は密接に関わりを持っていた。

本書が収録するのは、最新の観測機器や天文学の専門知識が存在しなかった時期に「肉眼天文学」により人類が蓄積した膨大な星の知識・伝承・信仰である。世界の様々な地域から星文化が集められ、本文に収録しきれなかった情報はコラムで紹介されている。収集の対象地域は全大陸と太平洋である。世界は広い。聞いたこともない星や神々の名前、地名、民族名が本書には幾つも登場する。本書を読めば世界一周した気分になる。しかも時を遡って紀元前から現在までの星に対する人々の信仰や伝承を伺い知ることができる。それらは多種多様で、日本で教わるギリシャ・ローマ神話に基づいた星や星座の文化がいかに限定的であるか思い知る。世界には人々の生活に根ざして生まれ育った星文化が溢れている。人々の宇宙観は住む場所（緯度）に依存して多様である。極地方に住む人にとっては星の大部分が周極星であり、地平下に沈むことなく地平線とほぼ平行に回り続ける。赤道に住む人が寝転んで夜空を見れば、星はただ東から西へ流れていく。中緯度域の人々は星が天の北極（あるいは南極）を軸に東か

ら昇り、空高くを通過して西に沈むのを見る。星の動きのこうした違いは、それぞれの地域に住む人々の心に根付く宇宙観に大きな影響を及ぼすだろう。気候の違いも無視できない。様々な土地で行われる農業、狩猟、漁撈に合わせて人々が作り上げた暦は、雨季と乾季しかない地域と四季がある地域、そして年中同じような気候が続く地域ではまるで異なるだろう。それぞれの場所で独自に積み上げられ、独自に発展した星の知識や宇宙観を、文字を持つ民族は膨大な古文書に綴った。文字を持たない民族は物語や歌として後世に引き継いだ。長期間にわたる民族の移動があれば、物語や歌はその起源となった地域を離れて伝搬する。類似する神話や伝承を辿ることで人々が移動した足跡を追うことが可能かもしれない。地球上に散りばめられた星や宇宙観のタペストリーは、人類そのものの来歴を写す。

本書は、人類学者、暦学者、考古学者といったいわゆる文科系の学者による星文化の入念な分析の集積である。末尾の星座名の索引を見れば、星座が各地域でどのように認識されているかを直ちに知ることができる。精密化、機械化された現代の天文学とは異なる、人類が生身の体で自然から読み取り利用した星の知識を、ぜひ味わっていたきたい。

吉田二美（産業医科大学）